

特集

ストーリー仕立ての観望会を作ろう

田中里佳（鈴鹿市文化会館 プラネタリウム／坂下星見の会）

1. はじめに

観望会は、普段実際の天体を目にする機会のない参加者に生の体験を提供できる絶好の機会である。しかし、ひとえに観望会といっても、参加者の年齢層や人数、実施する場所や使用する機材なども様々であり、規模の大小によってもいろいろなスタイルが考えられる。観望会での体験が参加者にとってより印象深く残るものにするにはどうすればいいか？天体の見せ方や場の作り方を工夫することで、ただ観望会に参加したというだけでなく、何らかの気づきやなるほど！という理解が生まれる場としての観望会を作ることができる。その手法として、ストーリー性を持たせた観望会を紹介する。

2. 世代別の天体観察会

日本公開天文台協会（JAPOS）の公開プログラムワーキンググループでは、天体観察会を構成する要素ごとに分解し、それぞれの中身を改めて見直すことによって、観察会の在り方の捉え直しと次世代の観察会についての検討を進めている。その中で、これまでの博物館の在り方の展開に用いられている「世代

別」の考え方[1]を導入し、天体観察会を特徴ごとに第1世代～第3世代まで分類を行っている。JAPOS 研修会資料[2]を元に作成した各世代の観察会一覧を図1に示す[3]。

公開天文台での天体観察会をベースにしているので、望遠鏡で「天体」を見せることが前提となっているが、一般の観望会にも展開できる要素がたくさん含まれている。

観察会を組み立てる前提となる条件として、まず1) いつどこで、2) 誰に見せるか、を設定する必要がある。それをもとにして、3) 観察会の目指すミッションと 4) テーマ、そして成果目標を設定していく。ここで、このテーマの設定などは、図1での[第2世代 テーマ展示型]の天体観察会の構成要素として捉えることができる(ちなみに、[第1世代 資料陳列型]はただ望遠鏡を使って適切な倍率で天体を見せる、ということまでに留まっている観察会を指す)。

例えば、下記のような観察会を想定してみる。

- 1) 日時：2月15日（土）20時～21時（月齢21.2）、場所：鈴鹿峠自然の家 天文台「童夢」
- 2) 対象：小学生くらいの子どもとその親
- 3) ミッション：普段なかなか見ることのできない星空を親子で楽しんでもらう。
- 4) テーマ：冬の星座を中心に、星の色比べをしよう。成果目標：星の色の違いから、星にも人と同じように一生があること知る。

このような設定をしたときに、次に考えるのは、どの天体をどういう順番で見せるかだが、その際に、5) ストーリーを持たせることによって、参加者により分かりやすく、かつ成果目標につなげるための流れに沿った天

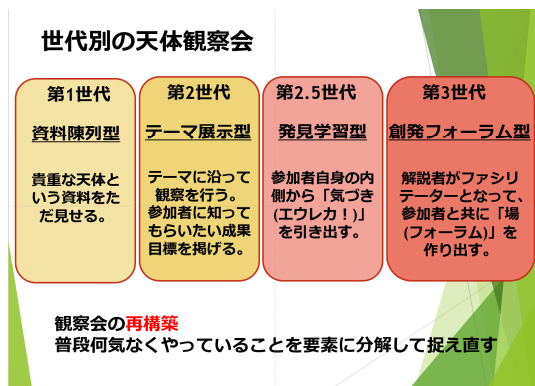


図1 世代別の観察会（発表資料より抜粋）

体の案内と解説が可能になる。ストーリーの例としては例えば、次のようなものが考えられる。

- ① 星空を見上げた中で、一番輝いている星、シリウスからスタート。真っ白い光の星。
- ② 実はいま空に見えている星たちはみんな同じ色ではなくて、他にもいろんな色をした星がある。空の高いところで輝いているカペラ。すこし黄色がかった星。
- ③ その少し西側で光っているアルデバラン。カペラよりももっと赤っぽい星。
- ④ 白→黄→赤と見てきた星たちは、実は星の一生と関係がある。星も人と同じように生まれてからどんどん年をとっていく。赤い星はもうおじいちゃんの星。逆に生まれたばかりの星たちが集まっているところがすぐそばにある。すばる(視野いっぱいの青白い星たち)。

3. 観望会にストーリーを

観望会で見せる天体の情報や知識は天文学に基づいた科学の知見である。普段は科学になじみのない参加者にとって、それは観望会で一度きりふれるだけの情報になってしまうことも十分にある。しかし、そこに何か、聞き手である参加者の頭の中に、気づきや理解という形ですとんと落ちるものがあれば、それはただその場だけの情報ではなく、記憶に残る宝物になる可能性がある。

先ほどストーリーに沿って組み立てた観望会において、参加者に「どのように見えましたか?」「どんな色だったかな?」などの問いかけをすることで、対話を通して参加者の感想を引き出すことができる。そうして得られた参加者自身の心の声は、その場にいる他の参加者とも共有することで、新たな気づきや理解が生まれることにつながる。これは図 1 でいうところの[第 2.5 世代 発見学習型]の観望会に他ならない。

このようなプラスの連鎖が起こるためには、

天体を見せる側、星空案内をする側が、参加者の声を引き出し、それを共有しやすい場をうまくつくることも大切である。「なるほど」「そうなのか!」といった、自分の中のこれまでの経験を通して得たなにかと紐づいたことで生まれる理解、それこそが、自分の中に新たなストーリーとして強く残るものになると期待される。

4. さらに一歩進んで

今回紹介した観望会の組み立て方は、おそらく多くの方が普段なにげなく行っていることかもしれないが、ストーリーというキーワードで改めて捉え直すことで普遍的な意識付けになることを期待している。さらに[第 3 世代 創発フォーラム型]のような、その場にいる解説者も参加者と一体となって、天体の観察という共通体験から得られた気づきを共有し、さらなる天文や宇宙への興味へと発展していくような会にもぜひ挑戦してみたい。

文 献

- [1] 伊藤寿郎 (1993) 『市民の中の博物館』, pp.141-174, 吉川弘文館。
- [2] 日本公開天文台協会(JAPOS)公開プログラムワーキンググループ, 第 7 回全国研修会(2019/1/28-30, 国立科学博物館, ギャラクシティ) 配布資料。
- [3] さらに第 4 世代としてインターネット環境と連携した次世代型公開天文台・天体観察会が検討され、実施も始まっている。



田中 里佳